

この話は、高知県で「土木神の化身^{けしん}」と呼ばれるほど堤防や堰、新田開発、港湾などの土木工事を行った野中兼山が宿毛のまちを洪水から守る堤防（総曲輪）を様々な工夫をして築いた話です。

総曲輪は、河戸堰から下流の松田川右岸を取り巻く堤防で、延長二、八〇〇メートル、幅員六〜一〇メートル、高さ四〜六メートルの大規模なものです。野中兼山の命により、幡多郡七万石の全地域から人夫を集め、宿毛の侍^{さむらい}たちがその監督に当たって工事を行ったものです。

それまで宿毛を流れていた支流をせき止め、川幅を広げて一本の川にまとめるための工事は並大抵の苦勞ではなかったに違いありません。伝承によると、兼山はどんなに寒い日でも仕事を休まず、「荒瀬の川が凍ったら休ませてやる」と言い、人夫たちは「雪や降り降り、あられも降り降り、荒瀬の川が凍るまで」という絶望的な詩を口ずさみながら工事を続けたと伝えられています。

兼山は、宿毛側の護岸に水勢をはねかえす「はね」を設け、水勢を対岸の和田や坂ノ下に向けるように工夫をしていました。また、宿毛対岸の古川口に水越堤防を設け、和田・坂ノ下の堤防を、宿毛より二〜三メートル低くして、洪水が氾濫した時は、先にこの堤防を越えさせ、和田、坂ノ下を水没させて水位を下げ、宿毛の安全をはかるようにしていました。このため、この工事以後、和田、坂ノ下両村の水害が絶えることがありませんでした。

藩政時代には領主の居る宿毛に抗議することは許されませんでした。和田の人々は高い台地に家建てて、住家を水害から免れるように工夫していましたが、水田は年々被害を受けていました。このため、和田の人々の中に兼山の悪口を言う人がいるとも言われています。



背景

宿毛のまちを守るために、野中兼山^{の なか けんざん}は万治元年（1658）に松田川右岸に「総曲輪^{そう くるわ}」と呼ばれる堤防を築きました。それと同時に、松田川左岸側の堤防を低くし、いざという時には左岸側に水が流れるようにして、宿毛のまちを守っていました。封建時代には左右岸の堤防の高さに違いを設けることにより、重要度の高い地域を守るための対策がとられていたのです。

アクセス 河戸堰（松田川）

- 土佐くろしお鉄道宿毛駅より北東へ直線距離約2 km
- 宿毛市中央
- 緯度経度 北緯32度56分23秒，東経132度43分51秒

